―鎌倉幕府への奏進から750年―

21世紀の『立正安国論』考

〈2回目〉

共生が綺麗事で終わってる　原井

経済危機で戦争のおそれが　丸山

対談者　丸山　照雄　日蓮宗僧侶 宗教評論家　×　原井　慈鳳　法華宗本門流 宗務総長

原井　そう仰いますが、土光敏夫さんとか財界では法華信仰を持った人もいます。僧侶だけではなくて、信者の中にも目を開く人は必ずいると思います。

丸山　その通りです。法華信仰を持った人物で忘れ去られていますが、元首相の石橋湛山がいます。湛山は戦後社会の人でとても身近な存在です。身近にいる法華信仰の先導者、そういう方の業績から学ぶこと、それから気概をいただくことは大切です。最近特に湛山に注目しています。

原井　湛山氏が首相になった時、私は中学生で、沼津で歓迎会があって会場に入りきれないほど人が溢れた。人々は遠巻きに湛山の演説を聞いていたと言われます。寒さの中で長時間。それが原因になったのか、湛山氏は心疾患かなにかで倒れてしまった。それで首相在任期間は短かった。仏法を持った人が世法に参画したのですから、もう少しの年月があれば日本の政治も変わったと思います。政官界の綱紀粛正を主張していました。

丸山　日本の歴史が変わってましたよ。

原井　ああいう法華魂を持った人がいれば…。

丸山　ぼくは湛山に直接叱られましてね。

原井　そうですか。

丸山　学生時代に問題を起こしまして、なぜか特別に東洋経済に呼ばれまして、お説教を食ったんです。その時に、その場を逃れようと思い、私は坊さんになるつもりですと言ったら、お前はそんなことを言ってるからダメなんだと怒られました（笑い）。

原井　そうですか（笑い）。

丸山　私の生涯で、坊さんになると言って叱られたのは石橋湛山だけですよ。ある面、坊さんの世界を知り尽くした方ですからね。

原井　特に戦後のオピニオンリーダーです。民主主義と仏法のバックボーンを持った、言論人としても素晴らしい活躍をされましたね。

――今日の社会に『安国論』を活かすには。

原井　世法が道を見失っている今日こそ、少しでも『安国論』の精神を注入していくのが私たちの仕事ではないか。「共生」という言葉は仏教界でよく用いられますが、綺麗事で終わっている。生物が共生できるのか。生態学の現実に合わず、弱肉強食は世の常。生きるとは他のいのちを奪うということですよ。そのことが忘却されている。日々、我々は動植物のいのちをいただいているわけですから、罪障消滅のため他のいのちに尽くさないといけない。この供養という精神こそ菩薩行の実践だと思っています。供養はまた懺悔に通じる。懺悔滅罪の教えを活かして、はじめて自らが生きることの意味を知る。

広がる国家間格差

いまはどれだけ利益を得るかで価値が判断される。言葉を換えれば、多くのエネルギーと多くのいのちを奪った者が勝ち組とされる。そういう価値観を転換していかないといけない。環境問題の専門家である東大の山本良一先生は地球温暖化により「地獄の門は開いている」と指摘された。そのことに警鐘を鳴らし、赤信号をつけるのは僧侶の仕事だし、今日の『安国論』の精神だと思うのです。

丸山　世界恐慌で経済危機がさらに深まると、戦争が起こる可能性があるし、経済・産業の状況から言うと戦争する余力はない。しかし、資本として力がなくても、恐慌の後に戦争が起こるというのは、戦争は巨大な公共事業だから。国を挙げての大事業。国家予算で大消耗戦をする。これが恐慌を救済する資本主義の方策であった。で、これが今後起こらないという保障はない。すでに紛争は中東地域にあるし、紛争のタネは東アジアにもある。だいたい戦争は作為的に始まる。それはイラク戦争がいい教科書です。まず、そういう恐慌や平和の危機に対して、現代の『立正安国論』として警鐘を打ち鳴らしていく必要がある。見方を変えれば戦争ほどと大きな環境破壊はないからです。

原井　その通りです。

丸山　総合的大消耗戦で環境破壊が行われ、イラク問題を考えれば、古代文明の破壊でもある。また、小泉以後、あるいはサッチャー・レーガン以後と言っていいのか、格差社会が物凄く進んで、今の米国の自動車産業のトップたちは働いている人の400倍の給与を取っているという。古い言葉で言えば、労働者は搾取されている。教皇のメッセージにも出てきますが、巨大な格差、富の偏在、日本にいるとそれだけの富が日本に集中しているか自覚できない。日本は何百万トンも食べ残し、一方で一日一食も食べられないまま餓死する子どもたちがいる。国家間の格差、さらに先進国内でも格差の問題がいたる面で生じている。こうした問題を一つひとつ見ていけば現代の『立正安国論』の素案ができるのではないか。

宗教と戦争の関係

原井　今のことで2点述べたい。富の偏在ですが、日本の富の大きな部分はわずか数%が握っていて、苦しい人たちは糊口をしのぐのが精一杯。豊かな国であると言いながら、幸福感を持っている人は非常に少ない。『安国論』の七難は天災が主体だが、今日の七難は政・官・産業・法制度・教育・医療の不備や不正が主体です。人間の仕業です。もう一つはイラク戦争ですが、米国においては戦争が起こると産業が潤うという世界があった。だけどこの戦争は、儲かるどころか、莫大な出費で今や米国経済を支えてきた産業や金融機関までが大打撃を受けた。ブッシュが始めた戦争で決して潤っていない。また多くの帰還兵たちが精神的に病んでいる。米国社会に深い傷跡を残している。

では、世界のキリスト教、イスラム教等、天国と地獄の一神教的二元論に対して仏教はどうかかわるか。全宗派、戦争はいいというところはないと思います。

丸山　しかし日本仏教には戦争に協力した歴史がある。

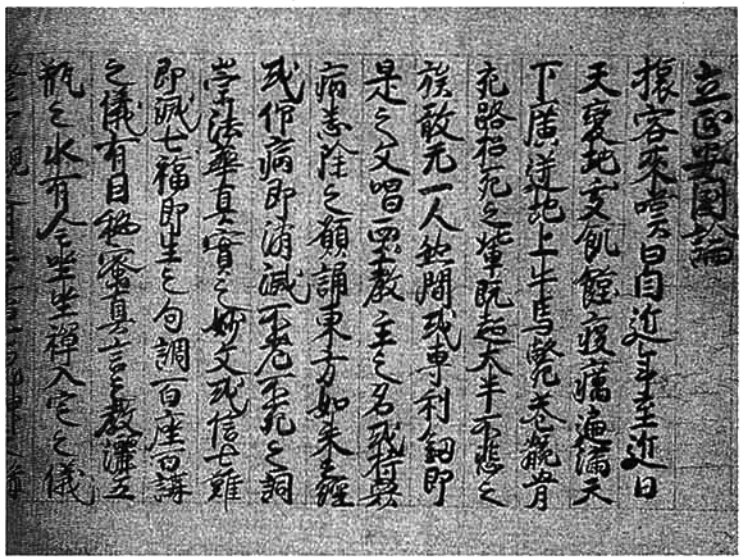
原井　全てではない。当宗は、兵器は献納しなかった。マンダラ不敬事件で教義も弾圧されました。そういう軍国政府を作らないことこそ歴史の学習です。

丸山　法華宗だけでなく、日本、あるいは世界の問題だと思うんです。

原井　そこで「なぜ仏教が」ということを話しているのであって、仏教には平和思想がある。

丸山　であるならば、仏教の平和思想はどうして世界に有効な働きかけができないのかを考えるべきでしょう。

（つづく）



国宝『立正安国論』の冒頭部分。重厚さを漂わせている。
―東京国立博物館編集『日本国宝展』(1990) より―

秋葉原事件後に設けられた献花台。若者をめぐる環境など現代の課題は多い（昨年6月）

対談者略歴

まるやま・てるお／1932年山梨県生まれ。立正大学中退。INEB（仏教者国際連帯会議）の創設に関わり、現在顧問。天晴塾・日蓮研究会などを主宰。歴史学者・上原専禄の最晩年に師事し、昨年秋、浄風会本化仏教研究所主催連続講座で「上原専禄の日蓮認識」をテーマに講演。著書多数。

はらい・じほう／1944年静岡県生まれ。早稲田大学卒。法華宗興隆学林卒。地元沼津市で「緑と歴史を守ろう会」を主宰し草の根の活動を展開中。平成9年、宗務総長に就任。平成19年宗内に菩薩行研究所を設立。初代所長として菩薩行の実践と「環境安国論」を説く。沼津市・妙泉寺住職。